

# 形のなかの街

—— 表象の日本橋の時空表現 ——

楠 田 恵 美

## 1. はじめに —— 橋から街へ ——

橋はそれ自体として方向性をもたず、兩岸のどちらにも属さずにいながらにして此岸と彼岸とを繋ぐ。渡り手が此岸と彼岸を導き出し、そして複数の渡り手の始点となり終点となることを同時に担うことを通じて橋は中心にもなる。橋のその単純な機能に対し、人びとがそこに発生させる意味は常に多様である。このような曖昧さに開かれた橋が、その曖昧さゆえに変形し、さらには曖昧さを失い定型化することがある。それは、それを組み込んだ周囲がいつの間にか街衢を成すことを超えて、一定の街区を構成しすでに意味ある橋として立ち上がるのである。このとき、橋は個々に過ぎ行く渡り手以上に強い結束力を持った複数の渡り手を迎え入れている。

本稿は、橋に対するこのような強固な営為が橋の機能や意味の表現にいかなる作用を与え得るかについて、戦前期の日本橋（現東京都中央区所在）を対象にして検討したい。当時、日本橋に表現を与え、日本橋の表現を束ね得た最も強固な主体は、日本橋区（1878～1947）という行政単位である。この行政単位は、戦後におけるその解体まで、自らの範域に日本橋を投影させてきた。そのことは日本橋区が制作した二つの区史<sup>3</sup>から確認することができる。日本橋区の解消後には、日本橋に対する新たな表現の集団的担い手として、「名橋『日本橋』保存会」（1968～）や『月刊日本橋』（1979～）が登場してゆく。戦前期において特徴的なのは、その前後の時期には不定形のなかで表現される日本橋が定型のなかで表現されることである。それは、1911年における橋の改架を契機としていと考えられる。

## 2. 先行研究 —— 区史の生成 ——

自治体史とは、自治体が経費を出して自らの範域内の歴史を編んだ刊行物のことをいう [高田 2009 b]。その成立は各自治体によって異なるが、戦前においては国家的イベントなどの外的要因に則して企画編集されることが多かった [高田 2009 a, b]。例えば、横浜市の市史編纂は、1909年における「開港50周年祭」の付帯事業として、名古屋市の市史編纂は、1910年に開催された「第10回関西府

県連合共進会」とともに行われている〔阿部 1999, 羽賀 2005〕。本稿で対象とする日本橋区の区史編纂の場合も、横浜市や名古屋市ほどの規模ではないとはいえ、日本橋区内で開催されたイベントと無関係ではなかった。

日本橋区の区史編纂の画期と考えられるのは、1911（明治44）年における日本橋の改架である。この年に日本橋は木橋から石橋へ改架された。この新日本橋の開通を祝い、さまざまな記念事業が計画された。そのなかに記念誌の制作があり、『日本橋記念誌』（1911）、『開橋記念日本橋志』（1912）、『日本橋区史』（1916）の三種類が確認できる。

『日本橋記念誌』は、日本橋の開通に合わせて予約販売された商業的記念誌であり、前半は写真アルバム、後半は著名人による日本橋に関するエッセイ、日本橋の歴史や改橋の工程に関する記事により構成されている。『開橋記念日本橋志』<sup>②</sup>は、日本橋の開通式を主催した有志「日本橋開橋祝賀会」の記念誌であり、写真や図、歴史的考証、工事のあらましに加え、開通式の模様や会計報告などが盛り込まれている。

そして、『日本橋区史』は、その編纂が新日本橋の開通直後に開かれた日本橋区議会によって議決されており、その背景には少なからず日本橋改架という出来事に関与していると考えられる。なぜなら日本橋区は、1878（明治11）年の郡区町村編制法の施行によって誕生した東京府に属する行政区<sup>③</sup>であり、その名称ゆえに当区は、否応なしにつねに・すでに在る日本橋を参照していくことを余儀なくされた行政単位であるといえるからである。そのため、1911年におけるこの日本橋の改架＝変形は、日本橋区にとって自らの存立基盤を動揺させる重大な出来事であったのである。

区の存立基盤としての日本橋が改架すること、その改架によって区史が編まれることは、区の空間領域を象徴する日本橋が、時間の表象として立ち上がることを意味する。この、橋の改架と区史の刊行の連関はいかにして可能なのだろうか。

この問題を考えるためにはまず、区史が叙述と図像から成る書物であることを確認しておかなければならない。区史のなかの叙述には歴史的、地誌的、民俗的、社会科学的叙述が含まれ、図像には版画や肉筆画などの絵画、写真、地図が含まれる。図版は当然複製であるが、叙述のなかにもすでに書かれたものからの多くの引用が認められる。

自治体史の叙述に注目した既存研究において、その歴史書としての不完全性が既に指摘されている<sup>④</sup>。その不完全性を認めたくえて、本稿では区史を、当該領域における当該領域についての概念やイメージの公的な歴史的表現物として捉える。このように区史を捉えた場合、その区史に織り込まれた図像にこそ、充分な注目を向けていく必要がある。なぜなら図像は「対象を表象・記述するひとつの方法」であるとともに、「イメージを共有する社会的な媒体として作用」するからである〔佐藤 2002：92-93〕<sup>⑤</sup>。すなわち、区史の叙述が表現しえない局面を図像は指し示すのである。

たとえば、若林幹夫（1995）によると地図は、空間の広がりをも一つの秩序に基づいて指し示したものであり、空間をそのまま写し取るというよりもむしろ、それはその空間の「社会の地形」を表象する。区史もまたその空間領域における「社会の地形」を公的視角から歴史的な表現を用いて表象したものであるといえよう。すなわち、区史は空間の広がりとそのなかで営まれる諸々の活動を項目ごとに「地図化」した上で、それらを時間的に束ねた形象として捉えられる。だから、各時代や地域によって地図が方法的、機能的に異なる表れ方をするのと同じように、区史もまたそれが生産される時代によって異なる現れ方をする。そして、受け手にある目的地点を提示するためにも地図が、画面上を密度の高い空間的情報で埋めることが重要であるのに対し、受け手に現在の時空を示すためにも区史には、既に生産された叙述やイメージなどを用いながら、設定する過去と現在を結ぶことが重要となる。したがって、区史の特質を挙げれば、それが「地図」の地層的表現であるということに見出される。

加えて、多木浩二（1994）は、アジェ（1857-1927）の写真を分析するなかで、街に形を与えるそのまなざしがどのように構成されているかを読み解いている。アジェの写真は「過去の歴史を組み込んだ現在の都市の地理学的記述」であり、それは「いわゆる地図ではなく」、それを前にして「われわれは自分の想像力のなかに時間と空間を組み合わせた地図を描くことになる」[多木 1994=2003：114]。アジェが画のなかにこのような時空を刻み込むことのできた地平には、写真の読み手として、文化財の記録を収集する図書館や美術館の存在が想定されていたことが指摘されている。都市の発達と破壊が、写真のなかにこのような「歴史」的表現を生じさせたのである。区史に織り込まれる、かつて書かれたものたちや描かれたものたちはまさに、そのなかで配列を与えられることで、歴史的に読解されることを強いられてゆくのである。

以下では、日本橋区で編纂された区史が当該領域に対してどのような表現をしたのかを明らかにしていく。次節では、日本橋の改架と区史の生成の連関とその後の区史編纂の行方を概観する。第4節では、区史のなかにおける日本橋区と日本橋の表現およびそれら相互の関係を確認する。続く第5節では、日本橋区の解消とそれに伴う日本橋に対する表現のありようの変容を踏まえ、そこから最後に、区史における日本橋表現のゆらぎや重なりを指摘して結びに代えたい。

### 3. 日本橋の改架と日本橋区の修史

#### (1) 日本橋の改架（1911）

1906年における架け替えの決定から計画、設計、工事まで5年間の歳月を費やした日本橋の改架が1911年に竣工した。この改架によって日本橋は従来それが有していた機能とそれに付加された意味を、恒久性のなかに記念することによって表現と機能を有する橋へと生まれ変わった。

日本橋改架をめぐり、その用材、様式や構造、装飾の決定にはそれぞれ多くの議論が噴出し、その議論に日本橋に対して与えられる多様な意味が表出していた。『開橋記念日本橋志』にはその一端がうかがわれる。

橋材に関しては、「日本橋は矢張り日本橋として江戸趣味を保存」したいという意見が出されたが、そのためには「腐朽し易い木材」を用いることとなり、これまでのように「時々修理を加へ架換を要するから、その都度将来益々進歩発展して頻繁を加へんとする交通を障害」し「市民の迷惑となる」という理由により、鉄材よりも「堅牢の点に於いても」、「美的価値」においても優る石材を用いることが決定した。様式については、石橋の橋型には「アーチ型が最も優美かつ高尚である」ということから、「木材を用いて純日本式に法り、江戸趣味を發揮するの悪くはないが、かくては実用に適せず、大都市の面目の上からも如何と思われたのでかく西洋式」が採用されることとなった。

このようにして橋の大まかな材料や様式が決定されたわけだが、それに加えて装飾に関する議論が立ち上がった。「江戸に最も縁故の深い、江戸の草創者とも謂うべき太田道灌と今日の繁栄の基礎を作った第一代将軍徳川家康公の像を安置しようという意見」が出されたが、すでに石材を用いた西洋式とすることが決定していたため、それでは調和を見ないという理由から、妥協点として「西洋趣味と日本趣味とを折衷したる一種の様式」が採用されることとなった。

結果、橋の両脇の柱には「東京市の徽章」を持たせた獅子、中央の柱には「鱧<sup>6)</sup>」を生やした麒麟が採用され、それぞれのランプ柱の模様には「里程の元標を表示した松と榎とが配」された。万獸の王たる獅子は、「橋に威厳を添え」、「大都市たる帝都の中央を飾るに最も適當」だとされ、「諸動物中の最高貴なる理想動物」の麒麟は、「東京市の繁栄を祝福するには最も恰當の物象」であるとされた。そして、橋名文字は、「旧江戸に最も関係の深い前十五代将軍徳川慶喜公」によるものとするに決定した [『開橋記念日本橋志』 pp139-165]。

改架の決議後、このようにしてすすんだ橋の石と装飾の青銅のなかに日本橋の意味が結晶化されるまでの過程は、主に新聞メディアを通じて報道された。この報道を通じて少なくない人びとが新しい日本橋のあるべき姿を、これまでの日本橋の意味を省みることを通じて想像したに違いない。以上のように旧式／新式、和式／洋式の間で揺れ動いた日本橋の新設は、その議論のあり方それ自体として日本橋の意味を歴史的に捉え返す機会を提供していたのである。

## (2) 『日本橋区史』(1916) の制作

東京市による市区改正の追加事業という名目下に行われた日本橋の改架は、その完成後、開橋式を東京市が、祝賀会を地元日本橋区の有志<sup>7)</sup>が執り行なった。開橋式は奏楽を挟み、工事報告、式辞、7名からの祝辞の順に進行し、渡り初めを以て終了した。その後、式は祝賀会に引き継がれ、来賓や祝賀会員は、祝賀会場において、おでんや団子、ビールなどの模擬店で飲食しながら、花火、踊り、

歌、能掛りなどの余興を見物した<sup>68</sup>。午後四時半から立食パーティが始まり、日が暮れるころに会はお開きとなった。当日、開橋式と祝賀会へは、3000人を超える出席者が参加したと推測され<sup>69</sup>、さらに午後1時からの開橋式を一目見ようと、「早朝より押掛ける者引きも切らず、正午頃には橋南橋北人を以て埋められるほどの群衆となった」という〔『開橋記念日本橋志』p189〕。

以上のように日本橋開通という大掛かりな式典を終えた翌々月の1911年6月、日本橋区では区会議員の建議により『日本橋区史』の編纂が議決された。議決当初の区史制作案は、明治維新以降、1911年までの日本橋区の行政の沿革および公共事業に関する事実を類別することであった。しかし、編纂の作業が進むに従い、単なる行政史に留まらない区史の編纂へ方針転換がなされた。その転換の理由として、区史のなかで「そもそも我が日本橋区今日の繁栄発達を致したる」由来は、「最も広くその遠きものあり」。「今これを詮索研究して本区繁栄の因由をたずね、行政上を始め、諸般の沿革を明らかにせば、今後一層本区の発達を期する上に於いて裨益するところ少な」くない。加えて「自治制の運用上に於いてもまた一つの参考資料となる」と説明されている。このような経緯で1911年7月に開始した日本橋の区史の編纂は、1913年12月にその追加編纂に再着手した後、1916年に完成を見た〔区史a1：「日本橋区編纂に就て」pp1-9〕。

このように日本橋区における初めての区史編纂は、行政が行政のための記録物、資料と成すことを目的として始められたものであることがわかる。しかしながらそれが行政事業の沿革にとどまらず、当該地域のさらなる過去の詮索に及んだことは、区の更なる繁栄を目指すという行政上の目論見が含まれていたといえる。とはいえ、区史の射程が行政的営為にとどまらず、その台座となる空間に及んだことは、そのなかに行政史にはすくいきれない局面がすべり込んでゆくことを意味する。区史からは、区がそのような台座に対してどのようなまなざしを向け、それを区という統一帯としていかに描き出そうとしたかを知る手がかりとなる。つまり、この区史編纂の展開は、行政としての日本橋区を描こうとすることから、行政の台座としての日本橋区を描き出すことへの推移として捉えられるのである。

では、具体的にどのように区史の編纂は進められたのだろうか。区史制作の第一段階目では、行政や公共事業に関する沿革の編纂作業が行われた。この資料収集には区会議長が事務の中野程之助を嘱託、その顧問に仁杉英、大庭知榮を嘱託した。そして第二段階目において区に関するより広範な沿革の編纂作業への取り組みが行われた。そのために区会議員のなかから9名の議員が編纂日本橋区史評議員に嘱託された。これらの評議員による評議の結果、東京市本郷区湯島切通坂町画報社の木澤孚に原稿の作成、写真の収集、筆耕料にいたる一切の編纂を嘱託することが決定した。木澤孚が編纂主任に、戸川安宅その他が編纂者となり、1913年10月に作業に着手、そして1915年8月に原稿3300頁、写真700枚が日本橋区史評議会に提出された。

しかしながら、評議会は書かれた内容に万全を期すため、さらに浅草区史・秋田県史編纂の経験をもつ史学専攻岡久毅三郎に文学博士喜田貞吉の指導の下で、提出原稿の改修補正を求めた。この作業は1915年9月から8ヶ月間かけて完了した。さらに評議会は、1916年4月、区内名誉職諸氏、ならびにその道の有識者の閲覧批評を求めた。その上で評議員会の審査を行い、1916年5月に印刷・製本の運びとなった<sup>(10)</sup>。

以上のような段取りで日本橋区における初めての自治体史は、本文全四冊と二冊の資料編から成る『日本橋区史』として完成した。第一冊が地理篇、第二冊が行政篇、第三冊が教育商工篇<sup>(11)</sup>、第四冊が雑纂篇の位置づけをもち、そこからは、行政篇に対して圧倒的に多くの頁が加えられていることが認められる。

### (3) 関東大震災(1923)と『新修日本橋区史』(1937)の制作

『日本橋区史』の刊行から21年後の1932年、日本橋区には新たな区史編纂の案が持ち上がった。それは、1932年2月に大里常弘区長(当時)より提案付議され、直ちに可決を見、同年同月、編纂に着手した。そして1936年3月に原稿の脱稿に至った。

序文において川口寛三日本橋区長(当時)は、本区史の刊行の契機を、次のように関東大震災に求めている。「旧区史の刊行以後本区の関したる変化少なからず」。「その最も顕著なるものをかの大正12年秋9月の大震災火災とする。その凄惨なる被害と為に失われたる犠牲は今日想起してなお慄然たるものがあるが、しかも区民の苦闘と当局の施設とは、焼土と化して現在見るがごとき復興を完成し終わった。最新計画による区画整理と加えるに建築様式の近代化は街頭の景観を一変」させ、「既に旧時の彷彿を探ぬるに由なきに至っている」。「歴史忘却の恐れなしとせざる理由はすなわちここにある」。「今区民の中にして旧区史を繙き、さてその古を思ばむとするも、該書の多くは震災に遭って之を求むるに難く、そのまた刊行の事震災前に属し、復興による変移の跡を詳らかにしない」。

東京市における帝都復興完成式典の開催は1930年3月であり、それからおよそ2年後に本区史編纂の発案があったということから、この頃ようやく日本橋区内においても日常生活が取り戻されようとしていたことが窺われる。だがしかし、震災と復興が従来の日本橋の〈地形〉の断絶を引き起こしており、その断絶を埋めるための機能が区史に求められていたのである。

また、このような状況下で、区民の中に前区史を紐解こうとする人がいたという指摘は、『日本橋区史』の読者が必ずしも行政内部のみではなかった可能性を示唆している。そのため本区史ははじめから行政よりもむしろ区民を読者として想定した上で編纂に取り掛かったと考えられる。

『新修日本橋区史』の制作には、編纂員の指導・原稿校閲の任に東京市史編纂嘱託安藤真方、編纂に渡邊泰三と樋口賢治があたったとその序文に書かれている。渡邊泰三と樋口賢治によって記された「小引」[区史b1:1-4]には編纂の過

程および方針が述べられている。

本書編纂に就任した者は編纂主任として桂泰蔵（1932年10月～1933年3月）、その補佐役として区事務員・島田秀作（1932年10月～1936年4月）であった。しかし、桂泰蔵の辞任により、継承者として渡邊泰三が編纂主任に就任する運びとなった。さらに三井武正（1933年4月～1934年3月）が補佐役として加わったが、一年後辞任し、その後任に樋口賢治が（1934年3月～）補佐役となった。以後、桂、島田、樋口の三名が主たる編纂の任にあたったという。以上の三名に加え、伊藤玄英、三井武正、西田寛策、高木義久、宮地龍雄、池田雄吉が編纂に携わり、主として資料の収集を島田、伊藤、三井、西田が、製図に高木、校正に宮地、池田が当たった。

本区史の編纂方針について、前区史である『『日本橋区史』を基礎とし此が内容に若干の補筆を加ふるに止むる予定であった』が、「同書刊行後の資料特に震災復興等の記述を加ふるならばその内容はさらに膨大なるものとなり、此を全部印刷に付するは経費の許すところに非ざるに、更に編纂の進行と共に新しき資料の取捨相互の必要上、寧ろ全編を書改むるの可なるを認め、編術の体裁又これに従ふことにしたのである」[区史b 1：2]という。すなわち、新区史刊行本来の計画では、震災時に発生した火災によって失われた前区史の代替となるような区史の刊行を目指したため、単なる前史の続編にするわけにもいかなかった。かといって単なる前区史の焼直しでは震災による著しい区の変貌を無視することとなる。だけれども本文のみでも全四冊ある前区史に震災後の変化を加えると膨大なものになってしまう。そこで、構成は旧区史の体系によらずに新しく章節を立て、旧区史の記述で使えるものは簡潔に要約したうえで用いた。このような経緯で上・下巻、各10章から成る区史が完成した。上巻は江戸時代、下巻には現代史（明治以降）が収められている。旧区史以後の出来事に関しては、下巻のうち、3章がこれに当てられている。

前区史以降の資料収集について、「大正4年以降、震災に至るまでは、資料の欠如するところ多く、記述に少なからぬ困難を経た」とある。それは大震災のためやむを得ない事情であるが、そのなかには1915～1923年の8年間の空白が認められる。

これまでに、日本橋区の区史編纂がいかなる条件で成立したかを確認した。以下では、そのなかに表示される日本橋という記号がいかなる範囲を与えられているかを明らかにしていく。

#### 4. 日本橋区の修辭と日本橋の修辭

1878（明治11）年の郡区町村編制法の施行において、東京府内は新たに15区6郡に分けられ、各郡区には名称が与えられた<sup>(12)</sup>このとき、日本橋という範囲を成す街区がはじめて定められたのである。

『日本橋区史』は、「我が日本橋区は、その位置、ほぼ東京市<sup>(13)</sup>の中央にあり。東は隅田川に接し、西は外濠を隔てて麴町区に對し、南は京橋区に接し、北は神田区・浅草区に隣りし、市内殷賑の中心たり。さればその日本橋は、江戸時代以來我が那交通路の起点となり、今に至りて尚帝國交通路元標の起点たり」という書き出しから始まる〔区史 a 1 : 1〕。

しかし、当区史のなかではそれ以上、日本橋区全体に対して一つの定義を与えずにいる。日本橋区の成立の項においても、「されば〔明治〕11年11月2日大小区割を廢し、日本橋区の創定せられたる当時は、實に142個町となれり」というように、非常に淡泊に叙述を進めている〔区史 a 1 : 161〕。敢えて区の特徴が挙げられているのは町誌の項である。「現に日本橋区として包容する所の地域は、幕政の頃より自ら武家地・町地に区分せられ」〔区史 a 1 : 159〕ると指摘した上で、そのうち旧武家地に當る町を全て列挙し、その他の各町が町地に當るとし、日本橋区が包含する全ての町の各史誌が叙述されている。そこでは、日本橋区に先行する各町の個性が優先されているのである。

『日本橋区史』が、その所在地と、「市内殷賑の中心」という言葉以上に自らの日本橋区を叙述する表現を見出せず日本橋がそこにすべり込んできているのに対し、それをひとつのまとまりある街区として生じさせようとしているのは、図像である。4冊から成る『日本橋区史』本文と対応させながら参照できるように構成された『日本橋区史参考画帳』には、そのなかに182枚の図版が収められている。そのうち、日本橋区の像として、高層建築から見晴らした三枚の鳥瞰写真と、各時代における日本橋区の範域に該當する数枚の地図が呈示されている。これらが、相補完しながら日本橋区という全体に像を与えている<sup>(14)</sup>。

しかしながら、このように日本橋区に一望を与えられずにいる『日本橋区史』に比べ『新修日本橋区史』では、区を一望的に記述する技術を見出している。例えば、日本橋区の白地図に江戸期各時代における土地利用のありようを描き分けている。さらに土地利用を武家地、町地、その他に分類した上で、それらの推移を図表に数値化している〔区史 b 2 : pp40-41の間に挟まれた6枚の図〕。

また、「日本橋区の地は江戸時代から大体が商業地であったが、東部の隅田川寄りの武家の邸宅地は、やがて貴顕の人々が別邸として用い、或は商人の住宅として明治の中葉に及んだ。而して東京市が年を追って發展するに従って、その中心をなす日本橋区も往昔の繁榮を恢復するに至った」〔区史 b 2 : 488〕と言い、前区史において全ての町が史誌を与えられていたのに対し、『新修日本橋区史』では、それが近世編に譲られ、現代史のなかでは、区内を7つに区分した上で、それぞれの区分域の史誌が記されている<sup>(15)</sup>。このうち1～4の部までは一括して「所謂問屋街として本区の特異な存在で、奥州街道を挟み、日本橋川、東堀留川、濱町川を利用する東京商圏の中樞である」〔区史 b 2 : 506〕と言いきっている。

とはいえ、いずれにせよ両区史は日本橋区という範域に一つの表現を与えることに慎重である。それに対して通りや橋を定位させることには、苦勞していない

図1. 「日本橋区の大観（其の一、三越楼上より南方を望む）」[『参考画帳』p1より].



ように見受けられる。

「日本橋通り」に対しては、「日本橋を中心として南は通一丁目より京橋区に通じ、北は室町より本町・十軒店・本石町・本銀町を経て神田区に続く大通りを言う。旧時金杉より万世橋に至る総称なりき。慶長8〔1603〕年、日本橋創架以降、此に三百余年、江戸繁榮の中心となり、今や又、区内繁昌の中心たると共に、又殆んど市内繁華の中心点たり。輪奐を極むる日本橋を夾んで、宏壮なる大商店・銀行・会社の建築相接し、車馬絡繹として昼夜を分たず、自ら行人の目を惹くものあり」〔区史 a 1 : 569〕と書かれている。

『新修日本橋区史』では、前区史には書かれなかった情報として、1878年における日本橋区の成立に関して「計142箇町を以て一区として日本橋区の名称が附せられた」。「本区は北江戸区に当たる筈であったが、これが変更されて日本橋区となったのである」。「言ふ迄もなくその名称は区内で最も有名な日本橋の橋名に依ったものである」と記載している〔区史 b 2 : 29-31〕。その、日本橋に関する叙述は、大震災を通過したこと<sup>(4)</sup>以外、区史と大差を認められない。

『日本橋区史』において、日本橋は、「橋梁」と「名所古跡」の項で採り上げられている。「橋梁」の項では、「本橋は東京市内の中心にして、又本区の中心点たるのみならず、我が国里程の元標にして、重要な位置を占め、架橋以来三百有余年の歴史を有す、この間前後改築する事14回に及び焼失したること6回、朽廃したること7回、大修復を施したること1回」と記され、各時代における日本橋の構造が示されている〔区史 a 1 : 49-50〕。この連綿たる改架・改築の記録を補完するように、「名所古跡」の項では、「区名の由来又此に遡るべし」〔区史 a

1 : 572] と、橋の創架年と橋名の由来を諸文献により考証した上で、近世から明治初期の名所記や名所図会のなかで描かれ、述べられた日本橋のありようを時代順に並べている<sup>(17)</sup>。この配列作業はまた、『参考画帳』や『新修日本橋区史』の巻頭図版でも行われている。

## 5. 日本橋区の消滅と日本橋の寡黙

### (1) 中央区の成立と『中央区史』(1958)の制作

戦後の東京都22区制の施行により、日本橋区は京橋区と合併し中央区となった。こうして誕生した中央区のなかにこれまでの京橋区や日本橋区の歴史も吸収されてゆくのだが、それは、中央区十周年記念事業の一環として刊行された『中央区史』を以て具現化した。本区史は1956年1月の第一回刊行委員会において編纂に着手、刊行までに満三年を要している。

序文において、野宗栄一郎中央区長(当時)は発行当事の中央区の現状を「あの荒涼たる戦災の跡は全く癒え、街街は旧に倍する繁栄を遂げた」。「銀座、日本橋の名はひろく諸外国にも謳われている繁華殷賑の巷であり、月島地区は都心工場街として独特の地位を占め、さらに晴海ふ頭の開港は同地一帯を首都東京の海の玄関として、一方の陸の玄関たる東京駅八重洲口とともに、首都高速の双翼をなし、躍進区勢の姿を如実に表している」と記している。

本区史刊行の経緯には「新しい日本国憲法の下、主権在民の理念に基く自治意識の高揚が、住民の区政に関する関心を深め、郷土への愛着と回顧を新たにさせた事実も見逃し得ない」。「かような傾向から区の歴史に対する関心が高められたのに鑑み、本区十周年を機会にその記念事業の一環として、区議会の協賛を経、新たに区史を刊行することと相成った」としている。

中央区十周年記念事業の一環としてその刊行が決定した本区史は、その編纂に先立ち、1956年1月に総務課文書係に「中央区史刊行委員会」という編集事務局が設置された。委員には区長をはじめ、区議会議長・議員、教育委員会委員、収入役、支所長、総務長、教育長の計13名。専門委員には都政史料館員、区史編集委員の計3名、合計16名が委嘱された。この委員会の決定により、本区史の編集スタッフは近世編執筆担当の安藤菊二、現代編執筆担当の可児弘明・野口孝一、写真担当の佐藤博人の四名で構成されることとなった。

安藤は、都政史料館へ通い、「東京市史稿市街篇」をはじめから閲覧しながら年表を作成したところ、中央区に関する事項は漏れなく既刊の区史に採録されていることを確認した。その上で漏れた記事を増補しつつ、一部を書き改め、近世編は完成した。

次いで現代編を可児と野口が分担執筆した。このほかに中央区紅葉川高等学校教諭丸山康が「町別・業種別の諸問屋一覧表」を、田原三郎が「区内町名の変遷表」、大沢義三郎が「銀座商店街の分析」および「中央区工業の特殊性」の二節、

慶應義塾大学文学部史学科有志が「日本橋馬喰町中村家文書」の調査分析、「横山町問屋街の各種実態調査」にあたった。

写真担当の佐藤は、写真の複製、スナップ写真の撮影をする一方で、統計の書抜き整理や、「人口と世帯」の章の執筆を担当した。加えて、区史編纂の付帯事業として「写真コンクール」が行われ、1957年10月の一ヶ月間、「中央区史掲載写真コンクール」と題し、広く写真愛好家の作品を募集した。この募集に対して約150点の応募があり、これらの応募作品のなかから複数の写真を区史に掲載した<sup>(18)</sup>。上、中、下の三巻から成る『中央区史』は、上巻に「序説」と「近世」を収め、中巻に明治以降の市街の変遷と産業経済関係を収め、下巻には政治・教育その他の項目が収められた。前区史では歴史と現代が半分ずつおさめられていたが、本区史では三分の一が通史、残りは現代史となっており、通史に割かれる頁数が縮小されている。そして、「中・下巻においては、特に明治以降の商工業の発展・都市生活様式の変遷に重点をおいて詳述した」[区史c 1 : 5]とあるように、行政に関わる事項が後部に移動し、区民の生活を記録することに重きがおかれようとしていることがわかる。

## (2) 定型からの解放、イメージの残余

定められた領域に橋を投影させてきた区の終焉により、日本橋という不定形な街衢が再び戻ってきた。『中央区史』では、中央区内を4つの地域に分け<sup>(19)</sup>、その上でそれぞれの街衢の変遷を記している。「日本橋界限」という項では、既刊の『日本橋区史』や『新修日本橋区史』とは異なる方法で明治以降の街衢の様相が述べられている。これまでの区史のなかで引用されてきたのは、近世の名所記や名所図会の類であったが<sup>(20)</sup>、『中央区史』では、回顧的な随筆や歴史的証言からの引用<sup>(21)</sup>が多くなり、歴史の語り口が同時代の証言の羅列から、現時代における回顧の羅列が多く見られるようになる。

「日本橋は繁華の中心であるばかりでなく、活気が満ちあふれている街として、東京のどんなところでもこれに及ぶものはなかった。いうまでもなく、その活気は、日本橋に続く魚市場から湧いてきたものであった。」「しかし、その屋台も震災後の魚市場の移転とともに消滅した。魚市場の移転は、震災が直接の契機となっているが、東京の中心部を形成する日本橋地区の近代的市街の発展が、都心地区にそぐわない台所——魚市場を漸次圧迫していったのである」[区史c 3 : 195-204]。

日本橋という街衢には、このように新しい表現形式が導き出されているが、日本橋そのものについては『新修日本橋区史』においてもその予兆が見られたとおり、『中央区史』においても新たな表現を与えられずにいる<sup>(22)</sup>。

このような、既に意味として存在している日本橋の叙述の限界を補うかのようには、図像は同時代の視点から日本橋を捉え続けている。『中央区史』には既刊の二つの区史が提示し得たものよりも古い日本橋の図像を筆頭に、発刊当時の日本

橋まで、その各巻巻頭に納められたものだけでもその数は11枚を数え、それらの図像からは日本橋に与えられたまなざしのその変遷をたどることができる。

## 6. おわりに —— 新たな叙述へ ——

1911年に石橋へ架け替えられるまでのあいだ、日本橋は幾度も架け替えられてきた。新たな橋はその前の橋の代理でしかなく、新たな橋もまた次に橋が架け替えられるまでの代理でしかなかった。だから、そこに絶対的な日本橋は存在しえず、その絶対性は人びとが橋に付与する意味において確保された。しかし1911年の改架が、橋のそのようなあり方を否定した。新しく古いその橋は、これまで架けられてきたすべての橋の代理となろうとし、それまでに付与されてきた意味をその中にすでに持とうとした。鉄橋と並び不燃堅牢な石橋は、次に架けられる新たな橋への想像を拒み、改架から歳月を経れば経るほど、そこに在り続けることが自明性を帯びるようになった。

この石橋への改架の年に『日本橋区史』の編纂作業が開始し、それ以降の区史は、日本橋が存続危機を迎えるたびに改めて編纂されてきた。関東大震災後には『新修日本橋区史』、戦後には『中央区史』が編まれた。

『新修日本橋区史(下)』(1937)の巻頭には、近代以降、発行当時までにおける各時代の日本橋の図像が全4枚採録されている。明治初年の写真、明治15(1882)年頃の錦絵、震災直後の航空写真、そして昭和11(1936)年刊行当時の写真である。これらの異なる日本橋の姿は、上巻に収められた近世の日本橋を起点にして近代以降の各時期を日本橋に表象させるのみならず、日本橋が定期的に架け替えられてきたことを読み手に容易に理解させる。

しかしながら、1911年における日本橋の改架以降、関東大震災によってはじめて橋の損失危機がもたらされたとき、橋をとりまく街のほとんど全てが焼失したにもかかわらず、改架後間もない橋は無事であった。この震災によって焼失墜落した橋梁は東京全市で289橋、損傷は70橋にのぼり〔区史b2〕、墜落や損傷を免れた橋でさえも、震災後の区画整理事業によって道路の移動や拡幅とともにほぼ全てが移設・改設された。最終的に移設を免れた市内3橋のなかで、ただ日本橋と鉄橋の鎧橋が改築を免れている〔区史c3〕。

『新修日本橋区史』、そして『中央区史』で繰り返される日本橋に対する「大震災にも能く耐へ」「大震災および戦災にもよくたえ」という表現は、橋が、そこに在り続けることを信じ始めようとする橋への意識の変容が認められる。かつてのように、街の時間の中で生じた橋の改架はなくなり、橋は次第に街のなかでも最も古い建造物に数えられるようになった。『中央区史』の次に刊行された『中央区三十年史』(1980)では、以下のように橋は当然そこに在り続けるものとしてまなざされていることが確認できる。

「今の日本橋は明治44年かけ換えが行われ石橋になっている。徳川幕府最後の

将軍慶喜が乞われて、このとき『日本橋』と『にほんばし』の橋標の書を書いたことは有名で、今でもこの字が使われている。戦後上に高速道路が通るようになり、橋の感じは悪くなったが、やはり『お江戸日本橋』、今でも日本道路の起点としての道路元標が建っている」[区史d1:974]。

図2.「現代の日本橋」『中央区三十年史(上)』巻頭より



以上の叙述と図像からもわかるように『中央区史』と『中央区三十年史』を隔てる橋に対する意識の変容として、橋がそこにあり続けることへの確信があり、さらにそれを補完する出来事として、高速道路の敷設(1964)がある。このとき、1911年以降の区史における図像の日本橋の優位から叙述の日本橋の優位へと反転し、その叙述は、「名橋『日本橋』保存会」(1968～)や『月刊日本橋』(1979～)へ引き継がれてゆくのである。

## 註

- (1) 『日本橋区史』は明治44(1911)年に編纂が始められ、大正5(1916)年に発行された。その後、昭和12(1937)年に『新修日本橋区史』が刊行されている。戦後、東京都22区制(直後に23区制となる)の施行に伴う日本橋区と京橋区との合併により中央区が誕生してからは、昭和33(1958)年、昭和55(1980)年の二度にわたり『中央区史』、『中央区三十年史』が編纂されている。なお、京橋区史は昭和8(1933)年、編纂に着手、昭和12(1937)年に前編が、昭和17(1942)年に後編が刊行されている。本稿で引用する際には以下の指示記号を用いる。

1916年『日本橋区史（第一 [区史 a]，二，三，四冊，参考画帳，御符内沿革図書日本橋の部）』
1937年『新修日本橋区史（上巻 [区史 b 1]，下巻 [区史 b 2]，別冊（「寛保沽券図」，「府内沿革図書」）』
1958年『中央区史（上巻 [区史 c 1]，中巻 [区史 c 2]，下巻 [区史 c 3]）』
1980年『中央区三十年史（上巻 [区史 d 1]，下巻 [区史 d 2]）』

このほか、1967年には『中央区20年のあゆみ』、1987年に『中央区40年のあゆみ——いま未来に向けて新たな躍動——』、1998年に『図説 中央区』、さらに2007年には『中央区 歴史・観光まち歩きガイドブック』が刊行されている。

- (2) 発行部数2000部。
- (3) 日本橋区は1947(昭和22)年に京橋区と合併して中央区となるまで存続した。ただし、京橋区との合併後に中央区となってからも、旧日本橋区に属した町は、町名に日本橋を冠することとなったため、合併以後も日本橋区の区域は少なからず残存している。
- (4) 例えば、高田はそもそも自治体史が当該市民に読まれないことを問題提起している [高田 2009 a, b]。また、阿部も、一般に名著といわれる『横浜市史』(1954-1982) について、「貿易と商業と都市政党政治やいくらかの労働運動がその主題となるばかりで、横浜の路地裏にある世界や、都市周縁に追いやられてもけっして弛むことのない旺盛な生活や、貧民窟と蔑まれペストの温床と糾弾されるなかでのごつごつとした日々の暮らしなどは、その余白にすらほとんど書き込まれることがなかった」と指摘している [阿部 1999 : 33]。
- (5) 佐藤 (2002) は、写真テクノロジーについてこのように言及しているが、この作用は敷衍して区史で扱われる範囲の図像資料についても当てはまると考える。
- (6) 「これは装飾柱に添えて見た時の釣合と一つは日本橋が里程の元標であったという所から大いに此処より翔らんとの意を寓したものである」 [『開橋記念日本橋志』 p 162]。
- (7) 東京市から開通式の交付金を受けたほか、日本橋区区会議長を発起人総代とする「日本橋開橋祝賀会」には、区内外の約1,000の個人法人からの寄付が集まった。
- (8) 日本橋区内の日本橋、柳橋、芳町の芸妓連による歌や踊り、三味線に囃子、市川団四郎と猿之助父子の「高砂」と「乗合万歳」が行われた。
- (9) この開橋会への公式な招待状は2,395名へ発送され、祝賀会員は1000人ほどであったことから推測。
- (10) 以上は、区長による序文、「日本橋区史編纂に就いて」 [区史 a : 1-9] の記述に基いた。
- (11) 教育は本来行政局の第二冊に収められるべきであるが、分量の都合により第

三冊に収められた。

- (12) 従来は大区小区制の下、番号による呼称であった。番号制を廃し、地名を与える理由を、「東京府下区郡町村編制趣意書」では、「其の名称たる衆人耳目の熟する所にして人心に適合し団結の力を増し諸事知熟に赴き易きは勿論、称呼に便にして記載に捷なり」[区史c 3 : 18]と説明している。
- (13) 明治21(1888)年、「市制特例」により東京府から東京市となる。
- (14) 『日本橋区史』には、未だ航空写真が使われていない。区の全体に像を与えようとする想像力を技術的に満たす航空写真は、『新修日本橋区史』でふんだんに使われてゆく。この段階においては地図の想像力が区に境界線を与え、鳥瞰写真の想像力が区に形を与えている。ただし、「日本橋区の大観(「三越楼上より」南方、東方、北方を望む)」と題された、三枚の鳥瞰写真には当然写りきれていない区内の部分が多く存在する。
- (15) 1879年、区内は区会議員の選挙に際し、府令によって7部に区分されていた。
- (16) 「日本橋は明治5年から同6年にかけて改架され、その後明治44年に至って再び改架されたが、その橋が大震災にも能く耐へて今日に至っている」[区史b 2 : 569]。
- (17) 出典文献は次の通り。創架年と橋名の由来考証には、『天正日記』、『墨水消夏録』、『江戸名所図会』、『慶長見聞集』が、各時代の日本橋のありようには『慶長見聞集』、『江戸名所記』、『東海道名所図会』、『江戸名所図会』、『江戸繁昌記』、『東京開化繁昌誌』。その他、詩歌の掲載あり。
- (18) 区史編纂が一種の区内のイベントとして機能する局面が立ち表れている。補足しておく、『日本橋記念誌』には、日本橋開橋というテーマで短歌と俳句の公募が行われている。
- (19) 1. 築地, 2. 銀座, 3. 両国・日本橋・人形町・その他, 4. 月島
- (20) 註(17)一覧に加え、『新撰東京名所図会』
- (21) 例えば、田島象二の回顧、『季刊』日本橋(1935)、田山花袋『東京の三十年』、『大東京繁昌記(下町編)』、野田宇太郎『下町(下)』など。
- (22) 「橋梁」の項では、「日本橋は明治5年から6年にかけて改架され、その後明治44年にいたり大々的に改架されたが、その橋が大震災および戦災にもよくたえ、多少の改修が行われながらも今日にいたっている」[区史c 3 : 388]とし、『新修日本橋区史』の記述をなぞっている。さらに付け加えると、『日本橋区史』『新修日本橋区史』同様、明治44年における改架の様子が次のように書かれており、明治44年以降の日本橋に対する新たな意味の発生を認めていない。「開通式は4月3日に行われ、旧日本橋区は区内のお祭の観を呈した程盛大なものだった。目抜き通りには軒々にずらりと提灯をさげ、橋をイルミネーションであしらい、夜空に遠目でもくっきり浮んだようにみえたという。この開通を祝って集まった市民は無慮数万人を数え、この雑踏で冠木門は倒れ柵は押潰され、数十名の死傷者を出し、また新聞も二日間にわたって各1ページをさ

いて報道した程で当時の一大盛時であった」[区史c3:390]。

#### 参照資料

- 安藤安1911『日本橋記念誌』日本橋記念誌発行所。  
松平泰夫2001「『東京市史稿』の表紙に描かれた麒麟と松について」『研究紀要』  
第三号，東京都公文書館，pp69-70。  
東京印刷株式会社1912『開橋記念日本橋志』。  
東京市日本橋区役所1916『日本橋区史 第一冊～四冊，参考画帳』。  
東京市日本橋区役所1937『新修日本橋区史 上巻，下巻』。  
東京市京橋区役所1937，1942『京橋区史 上巻，下巻』。  
東京都1958『区制沿革：名主制から区制への推移』（都史紀要5）。  
東京都中央区役所1958『中央区史 上巻，下巻』。  
東京都中央区役所1980『中央区三十年史 上巻，下巻』。

#### 参考文献

- 阿部安成1999「横浜歴史という履歴の書法——〈記念すること〉の歴史意識」『記憶のかたち——コメモレイションの文化史』柏書房 pp25-80。  
羽賀祥二2005「産業都市化と郷土史の形成——名古屋における博覧会と歴史祭典」『記録と記憶の比較文化史』名古屋大学出版会 pp328-357。  
佐藤健二2002「テクノロジーと記録の社会性」『歴史叙述の現在——歴史学と人類学の対話』人文書院 pp64-98。  
高田知和2009 a 「自治体史誌の社会学・再論」『応用社会学研究』東京国際大学 pp17-39。  
——2009 b 「自治体史の社会学——地域の歴史を書く・読む・見る」『年報社会学論集』関東社会学会 pp. 10-21。  
多木浩二1994→2003「都市の遊歩者」『写真論集成』岩波現代文庫 pp114-138。  
若林幹夫2000『都市の比較社会学』岩波書店。  
——1995→2009『増補版 地図の想像力』河出文庫。